

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00421

研究課題名（和文）冷戦期におけるウィリアム・フォークナー日本訪問の文化・文学史的意義の研究

研究課題名（英文）A Study on the Cultural and Literary Historical Significance of William Faulkner's Visit to Japan during the Cold War

研究代表者

相田 洋明（Soda, Hiroaki）

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・教授

研究者番号：70196997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：相田洋明を編著者とする論集『ウィリアム・フォークナーの日本訪問 冷戦と文学のポリティクス』を出版し、相田洋明はフォークナーの日本訪問中の行動を一日単位で検討し、さらに『長野でのフォークナー』を分析した。森有礼は、フォークナーのメッセージが日本人の太平洋戦争の記憶・トラウマに対する「文化療法」として機能した可能性を指摘した。金澤は訪日をはさんで発表された二つの作品、『墓地への侵入者』（1948）と『町』（1957）を比較し、『町』に見られる楽観性の背後にフォークナーが長野で見いだした教育の可能性への信頼があったと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本の文化史において重要な意味をもつフォークナー訪日であるが、研究はほとんど進んでおらず、日本におけるフォークナー文学研究の側からの論考もほとんどが散発のエッセイ的な回顧録にとどまっていた。本研究の学術的意義は、この研究上の空白をうめ、フォークナーの訪日が日本文化に与えた影響を測り近年高まりを見せる日米文化冷戦研究へ貢献するとともに、日本のフォークナー文学研究にこれまで必ずしも十分ではなかった文化政治の領域からの視点を付け加えた点にある。

研究成果の概要（英文）：We published a collection of articles entitled William Faulkner's Visit to Japan: The Politics of the Cold War and Literature edited by Soda Hiroaki. Soda examined Faulkner's activities during his visit to Japan on a day-by-day basis and further analyzed Faulkner at Nagano. Mori Arinori pointed out the possibility that Faulkner's message functioned as "cultural therapy" for the Japanese people's memories and trauma of the Pacific War. Kanazawa Satoshi compared *Intruders in the Dust* (1948) and *The Town* (1957) and concluded that behind the optimism in *The Town* was Faulkner's faith in the educational possibilities he found in Nagano.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：フォークナー 冷戦期のアメリカ文学 日米交流 アメリカの文化外交 戦後日本文化 日本のアメリカ文学研究の制度化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1955年（昭和30年）のウィリアム・フォークナーの訪日は、冷戦期アメリカの文化外交の一環であり、親米的な文化を西側諸国の一員たるべき日本に根付かせることが目的であった。戦後日本の文化史において重要な意味をもつこのフォークナー訪日であるが、研究はほとんど進んでいない。まとまった論述としては藤田文子『アメリカ文化外交と日本』（2015）の第四章「ウィリアム・フォークナーと日本」があるのみであり、たとえばフォークナーが日本で何をしていたかという一日単位の基本情報についても十分には明らかでない。

とりわけ日本におけるフォークナー文学研究の側からの論考は、散発のエッセイ的な回顧録を除けば、ほぼ皆無と言ってよい状況であった。日本でのフォークナーを描いたドキュメンタリー映画 *Impressions of Japan*（『日本の印象』）もフォークナーの日本での対談・インタビューを収録した *Faulkner at Nagano*（『長野でのフォークナー』）も分析対象とならず放置されたまま60年以上が過ぎた。本研究はこの研究上の空白をうめることを目指すものである。

2. 研究の目的

1955年の8月1日から23日まで、フォークナーは国務省人物交流計画により訪日した。6日から15日までの長野における「アメリカ文学セミナー」への参加を中心に、東京と京都でも日本の作家・文化人、英米文学研究者、ジャーナリスト、一般市民と対談・インタビューなどを通して交流した。

本研究は、冷戦期アメリカの文化外交の一環として行われた、このウィリアム・フォークナーの日本訪問を、敗戦後10年、講和後3年の日本文化の状況のなかに位置づけ、フォークナー訪日が戦後日本に与えた影響を検証するとともに、この訪問が作家の晩年のキャリアにおいてどのような意味をもちえたかを探ることを目的とする。

3. 研究の方法

上記目的を達成するために、第一に、日本におけるフォークナーの行動の一日単位での詳細な検証とドキュメンタリー映画 *Impressions of Japan* およびインタビュー集 *Faulkner at Nagano* の分析を行う。

第二に、フォークナー訪日を、同時代の日本の具体的な文化状況（フォークナーが来日した1955年は1954年のビキニ環礁でのアメリカによる水爆実験とその被爆被害をきっかけとして、全国的に戦後日本の国民的トラウマとも言える戦争と核に関する記憶がよみがえった時期でもある）と関連づけ、冷戦期の文化的・社会的・政治的文脈の中で再考する。

第三に、訪日前後のフォークナーの作品を比較分析し、訪日が後期フォークナー文学に与えた影響を測る。具体的には、訪日直後に書かれた『町』（1957）と、『町』と同じくギャヴィン・スティーヴンズとチック・マリソンが登場人物・語り手として中心的な役割を果たす『墓地への侵入者』（1948）を比較する。

4. 研究成果

相田洋明を編著者とする論集『ウィリアム・フォークナーの日本訪問——冷戦と文学のポリテイクス』（2022年）を出版した。

相田はフォークナー訪日研究の必須の基礎作業として日本におけるフォークナーの足跡を一日単位で詳細に記述し、さらに『長野でのフォークナー』を分析した。『長野でのフォークナー』が文化外交としての訪日という政治的イベントの記録文書から、フォークナー研究者必携の作家インタビュー集『庭のライオン』（1968年）という文学的テキストへと変貌するさまを略述したのち、『長野でのフォークナー』の内容を分析し、「日本の若者たちへ」でフォークナーは日本とアメリカ南部のあいだに敗戦を媒介とする類似性を設定し相互理解の可能性を示したが、いっぽうで戦後のアメリカ兵の振る舞いやアメリカの人種差別を巡るやりとりでは、差異と相互理解の難しさが際立つ瞬間も記録されていることを指摘した。

森有礼は、日本人の太平洋戦争の記憶・トラウマの物語である『ゴジラ』（1954年）とフォークナー訪日の同時期性に注目し、『日本の印象』を含むフォークナーのメッセージが日本人に対する一種の「文化療法」として機能したことを論じた。本論において森は、第一に、冷戦期アメリカ文化外交におけるフォークナー来日の政治的意義と日本における戦後のフォークナー評価の確立について「日本の若者たちへ」が果たした意義を文献実証的に検証し、第二に、『ゴジラ』に表象される戦争のトラウマ的記憶に対して、フォークナーの訪日が一種の文化療法として機能したことを確認し、第三に、こうした「文化療法」が戦後を通じて太平洋戦争に対する国民的憂鬱症を再度抑圧し反復する結果となったと主張した。

金澤哲は、訪日をはさんで発表された二つの作品、『墓地への侵入者』（1948年）と『町』（1957年）（両作品ともにギャヴィン・スティーヴンズとチック・マリソンが登場する）を比較し、『町』にはフォークナー作品にはまれな楽観性が見られることを指摘したうえで、この楽観性の背後

にフォークナーが長野で見いだした教育の可能性への信頼があったと結論づける。『墓地への侵入者』は政治的なテーマが前景化されているとはいえ、冷戦以前の枠組みで書かれているのに対し、『町』には「封じ込め」と「教育」という冷戦期に特徴的な主題を見出すことができる（ギャヴィンによるスノープス主義とユーラのセクシャリティに対する「封じ込め」と同じくギャヴィンによるリンダへの「教育」）。しかしもっとも注目すべき『町』の特徴は、ウォールストリート・スノープスの刻苦勲励によるスノープス主義からの解放やリンダの東部名門大学への進学に見られる「教育」に対する信頼とそれに基づく楽観性である。これはフォークナー作品にまれなものであり、その背景には長野セミナーでの真剣さと情熱に満ちた日本人学究たちとの交流があった。そしてその後の日本におけるフォークナー研究の興隆は事後的にフォークナーの教育への信頼を裏書きするものとなったと指摘した。

また、2019年長野市立長野図書館において公開講座「長野を訪れたノーベル賞作家 ウィリアム・フォークナーと長野」を開催し、金澤哲が総合司会を務め、相田洋明は講師として「ウィリアム・フォークナーと長野」のタイトルで講演した。

また、本研究はMichael Modak-Truran 監督によるウィリアム・フォークナーの世界初の伝記映画 *Faulkner: The Past is Never Dead* (2023年) の日本ロケ等の制作に協力し金澤はコプロデューサーを務めた。金澤、森は2023年3月にミシシッピ州オクスフォードで開催されたOxford Film Festival における本作品の世界初上映プレミアに参加し、さらに金澤はDeborah Cohn, W. Ralph Eubanks, Robert Hamblin, Jay Watson 等とともに記念パネルディスカッションに登壇して、フォークナーの日本への影響および現代における重要性について語った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森有礼	4. 巻 41
2. 論文標題 日米における国民作家フォークナーの創生 Faulkner at Naganoからみる合衆国の文化外交戦略とその受容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中京英文学（中京大学英米文化・文学会）	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 相田洋明	4. 巻 15
2. 論文標題 ウィリアム・C・フォークナー（1825-1889）研究 その生涯と二つの長編小説『メンフィスの白い薔薇』と『れんが造りの小さな教会』を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化学研究 英米言語文化編（大阪府立大学人間社会システム科学研究科人間社会学専攻言語文化学分野発行）	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金澤哲	4. 巻 63
2. 論文標題 William Faulkner の Pylon における「作家」の問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英文学論叢（京都女子大学英文学会発行）	6. 最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森有礼	4. 巻 24
2. 論文標題 フォークナーの日本訪問と、アメリカ文化外交における「戦後」 - - フォークナーの「日本の印象」及び「日本の若者へ」を『ゴジラ』（1954）と共に読む - -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際英語学部紀要（中京大学国際英語学部発行）	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤哲	4. 巻 62
2. 論文標題 Between Allegory and History: Reading William Faulkner's Fable	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英文学論叢（京都女子大学英文学会発行）	6. 最初と最後の頁 28-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 相田洋明
2. 発表標題 フォークナーとエステル - - フィクションを介した愛
3. 学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会第24回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相田洋明
2. 発表標題 フォークナー訪日の実情
3. 学会等名 フォークナー訪日論集研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森有礼
2. 発表標題 『日本の印象』研究 フォークナーと『ゴジラ』のレトリック
3. 学会等名 フォークナー訪日論集研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相田洋明
2. 発表標題 ウィリアム・フォークナーと長野
3. 学会等名 長野市立長野図書館講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森有礼
2. 発表標題 フォークナーと「パターナリズム」 来日記録映画『日本の印象』における「父祖」の政治学
3. 学会等名 英語圏文学研究会（第三期）2019年度第二回研究会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金澤哲、出口菜摘、池末陽子、山根亮一
2. 発表標題 アメリカ文学研究の終わらない戦後／南部／昭和
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第58回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相田洋明、森有礼、金澤哲、藤野功一
2. 発表標題 “Teaching Faulkner in the Digital Age”
3. 学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会第22回全国大会ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金澤哲
2. 発表標題 William Faulkner, a Book Designer
3. 学会等名 関西フォークナー研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 相田洋明、森有礼、金澤哲、梅垣昌子、山本裕子、山根亮一、越智博美、松原陽子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 233
3. 書名 ウィリアム・フォークナーの日本訪問 - - 冷戦と文学のポリティクス	

1. 著者名 亀井俊介、中垣恒太郎、水口陽子、森有礼、森岡隆、山口善成、渡邊真由美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 288
3. 書名 物語るちから	

1. 著者名 竹内理矢、山本洋平、金澤哲、相原優子、阿部公彦、石原剛、稲垣伸一、上西哲雄、大地真介、岡本和子、小椋道晃、折島正司、梶原照子、加藤有佳織、木原善彦、来馬哲平、後藤和彦、小林久美子、齊藤昇、坂根隆広他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 深まりゆくアメリカ文学	

1. 著者名 ジョエル・ウィリアムソン著 / 相田洋明、森有礼、金澤哲監訳 / 梅垣昌子、田中敬子、松原陽子、山下昇、山本裕子訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 538
3. 書名 評伝ウィリアム・フォークナー	

1. 著者名 金澤哲、新田啓子、小林久美子、後藤和彦、阿部公彦、大地真介、竹内理矢、笹田直人、クリストファー・リーガー、藤平育子、花岡 秀、田中敬子、千石英世、中野学而、諏訪部浩一、大橋健三郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 441
3. 書名 フォークナーと日本文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 有礼 (Mori Arinori) (50262829)	中京大学・国際英語学部・教授 (33908)	
研究分担者	金澤 哲 (Kanazawa Satoshi) (70233848)	京都女子大学・文学部・教授 (34305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------